

# 河川生態学術研究会の木曾川現地視察会 および 第22回 河川生態学術研究発表会

自然環境グループ 研究員 内藤 太輔

当研究所が事務局を務める河川生態学術研究会（以下、研究会）の活動として、令和元年に開催した「木曾川現地視察会」と「第22回 河川生態学術研究発表会」について報告します。

この研究会は、平成7年に生態学と河川工学の研究者が共同して創設したもので、河川における生態系の解明とその上に立った河川管理について研究、議論するとともに、次世代を担う研究者を育成することを目的に取り組みを進めています。

## ●木曾川現地視察会

研究会には、テーマと対象河川・流域を設定してプロジェクト研究を進める複数の研究グループが参加しています。研究会は、毎年、これらの研究グループのフィールドを順に視察しており、実際の調査箇所の状況とあわせて研究内容を理解し、より具体的な議論を行うことで各研究の質的向上を図っています。

今回は、森誠一教授（岐阜協立大学）が代表を務める木曾川研究グループのフィールド木曾川水系を対象とし、令和元年10月3日に現地視察、翌4日に意見交換会を行いました。

初日の現地視察では、イタセンパラの生息地になっている木曾川の氾濫原水域、ハリヨの生息地となっている湧水域を回りました。それぞれの生態系の現状、劣化要因やメカニズムの解明、およびイタセンパラ、ハリヨの遺伝的多様性、集団構造・動態に関する研究について木曾川研究グループのメンバーから説明がありました。

例えば、イタセンパラについては、産卵床である二枚貝の生息環境（氾濫原水域）が冠水頻度の低下や樹林化に伴う落葉の増大を介して劣化していること、形成後の経過年数が短い“若いワンド”が適地となっていることなどについて説明がありました。ハリヨについては、津谷川本川への湧水の横流入分布、湧水周辺地下水位の降雨に対する応答など水文学的な研究成果などについて説明がありました。

また、河川管理者の木曾川上流河川事務所からも地域と連携したワンド保全対策など河川環境に関する取組についての説明がありました。

二日目には、ポスター発表とプロジェクト研究についての意見交換がありました。木曾川研究グループの研究テーマは、“木曾三川流域における生物群集を対象とした河川生態系の管理手法に関する研究”であり、意見交換では、研究に加えて川づくりの観点からも議論が交わされました。

## ●第22回 河川生態学術研究発表会

令和元年11月7日に東京大学弥生講堂・一条ホール（東京都文京区）にて、「第22回 河川生態学術研究発表会」を開催しました。

本研究発表会は、生態学と河川工学の研究者が

共同で生態学的な観点より河川を理解し、先進的な研究の成果を発表・議論することを目的とし、研究会と応用生態工学会の共催で開催しています。

今回の河川生態学術研究発表会では、研究会に参加する木津川、木曾川、石狩川・十勝川、千曲川の4研究グループの発表、千曲川の研究に関する総合討論、およびEco-DRRをテーマにしたポスター発表、話題セッションがありました。

参加者へのアンケート結果では、いずれのプログラムにも関心が持たれていましたが、特に話題セッション「Eco-DRRの最前線」へ関心が持たれていました。研究分野や背景の異なる4人のパネリストがそれぞれの観点でEco-DRRに関する話題提供を行ったこと、最初に西廣淳主任研究員（国立環境研究所）が概念の説明を丁寧にしたことなどが、参加者の理解につながったのではないかと思います。

来年度も秋ごろに開催予定ですので、ご興味のある方はぜひご参加ください。

### 1. 研究グループの研究発表

- ・木曾川研究グループ 森 誠一教授 代表
- ・木津川研究グループ 竹門康弘准教授 代表
- ・石狩川・十勝川研究グループ 中村太士教授 代表
- ・千曲川研究グループ 平林公男教授 代表

### 2. ポスターセッション（計26件）

- ・石狩川・十勝川、千曲川、木曾川研究グループ
- ・Eco-DRRに関する研究（応募7件）

### 3. 話題セッション

テーマ：Eco-DRRの最前線

※コーディネーター：島谷幸宏教授（九州大学）

※パネリスト：浦嶋裕子氏（MS & AD インシユアランスグループホールディングス・三井住友海上火災保険）、瀧健太郎准教授（滋賀県立大学）、西廣淳主任研究員（国立環境研究所）、武藤裕則教授（徳島大学）



図 研究発表会の様子（参加者189名）